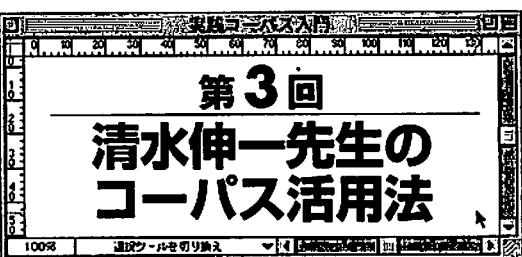


投野式 実践 コーパス入門

公開! 授業に生きる活用術



明海大学 外国語学部教授 **投野 由紀夫**

さて、コーパスと具体的な英語授業実践をケーススタディ風にご紹介しているが、今回紹介するのは愛知県にある安城学園高等学校の清水伸一先生の実践だ。清水先生は知る人ぞ知る「テキスト処理の達人」だ。清水先生は私と知り合う以前からテキストの語彙集計や学習語彙表の研究を独自にされていて、大学英語教育学会の学習語彙表である JACET4000 の改訂作業で一緒にした際も、JACET8000 の基礎データ処理を一手に引き受けて perl というスクリプト言語を使って処理されたような方である。

その清水先生の授業実践へのコーパス活用法は多岐にわたるが、今回はその一例を拝見しよう。



清水先生の実践の1つとして高校3年生に実施した選択の英作文の授業を紹介しよう。

投野：この選択英語の授業はいつ頃からやってらっしゃったのですか？

清水：今回紹介したのは1997～98年の実践を LLA（現LET）で発表したものですので、もう10年近く前です。

投野：私がランカスターに行く前ですね。具体的にはどういう内容だったのでしょうか？

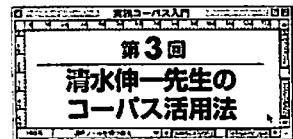
清水：高校3年生の選択英作文の授業です。年間を通じてコンピュータを使って英作文をさせます。その中心は電子メールによる海外のペンパルとのやり取りなんですが、さらに、生徒個人のホームページ作成、ストーリー・リレーへの参加、調査・まとめ学習等も行いました。

当時は Windows なら 95 環境、マックの方がやや進んでいた時代だが、インターネットへの接続なども非常に面倒くさかったはずだ。実際にお聞きしてみると、電子メールの送受信はまだ生徒一人ひとりが自由に出来る環境ではなかったそうで、清水先生が各自のメールをすべて1つのアカウントから送受信を代行されていたと言う。実に涙ぐましい努力ではないか！

清水：1つのメールアカウントですべての送受信を行っているのが逆にメリットでもあるんです。このアカウントを使用したすべてのメールのファイルが私の手元に時系列で残りますからいつでも閲覧可能となります。着信したメールはプリントアウトして生徒に手渡します。授業のない日でも着信があるかどうかがわかるようになっていました。電子メールの相手は海外から送ってくるので主にクラスを単位としていましたが、個人的なメール相手も各生徒に一人程度の割合でいましたね。

投野：最終的にどのくらいの分量になったんですか？

清水：1997年だけで送ったメールの総数は1500



以上。LLAで発表した際の学習者コーパスのサイズは15万語になりました。

つまり、このような一見教師には過酷な環境を逆手にとって、生徒の作文をコーパス化するという方法をとっていたわけである。1年間で集まったデータ量も相当なものだ。

今はこういったことがあつという間に出来る環境が整っている。当時の清水先生の100分の1(?)の手間でデータが集まるのであるから、先生方も是非やってみてはいかがだろうか?



手紙例文集をコーパス化

投野：手紙を書かせる際にもコーパスを利用していたですね。

清水：手紙例文検索用のコーパスは、生徒がブラウザで検索しながら、それを参考に電子メールを作成できるように作りました。トータルでは数冊の手紙の例文集を、OCRや打ち込み等で入力しています。授業用なので市販のものを自前で作成しました。また、実際の電子メールから適当な表現を抽出し、付け加えてあります。

投野：たしかに作文の書き方をいちいち生徒のレベルに合わせて教えるのは難しいですものね。

清水：はい。授業では統一の教材が基本的には存在しないため、個々の生徒の質問にすべて答えることはできないので、このような補助資料は必須となります。補助資料としては、他に、電子辞書やスペルチェックを使用しました。

電子メール例文検索用ページの例

投野：生徒は授業以外でも資料を見られるのでしょうか？

清水：ええ、このコースで使用したコンピュータは図書館に設置しており、授業時間以外でも使用できました。コンピュータの台数が十分ではなかったので、1台のマシンを2人で使用させました。

この授業は清水先生以外に外国人教師が1名専属ではりついていた。それでも、具体的な英作文の際に生徒が持つ疑問に教師がすべて答えることは難しい。それを「手紙例文集」をコーパス化し、電子辞書などと組み合わせた補助資料を作ることで、生徒が「自分で調べて書く」という学習の習慣付けをしているわけだ。

さらに97年の当時で、パソコンをなるべく自分で自由に触れられる環境（これをself-accessという）にしている。「環境整備の重要性」を改めて感じさせてくれる。



ストーリー・リレーと 生徒のホームページ作成

投野：電子メール以外にホームページ作成なども紹介してください。

清水：私としてはこの授業では電子メールはコミュニケーション、ストーリー・リレーとホームページ作成は英作文とわりきって考えました。ストーリー・リレーはwebページ上で物語をどんどん付け加えて発展させていくものです。（サンプルweb画面参照）

Danny and Mary

There was a tall boy called Danny. He worried about how tall he was. Because his classmates made fun of his height, he didn't like to go to school very much. But he was very dependable, so he was never absent from school. One day, on his way back to his house from school, he came across Jim who always teased him. Danny quickly left Jim. Then Jim shouted loudly to him, "Wait, Danny!" But Danny didn't stop. He ran away. Jim still shouted... When Danny got to his house, he saw a girl who was his neighbor called Mary. "Hi, Mary. How are you?" Danny said. "I'm fine, thank you, Danny. Would you come to my house?" Mary said. "Yes, I promise. See you later," he replied. Mary was a very pretty girl, but she was a little weak, so she didn't go to school much.

Mary had a disease that no one knew about except her parents and family. It wasn't contagious, but her parents still didn't want her to go to school while she was weak. Her disease was called AIDS. Mary told Danny because she trusted him to keep it a secret. She made Danny swear he wouldn't tell anybody, and he didn't. One day Danny was at school getting made fun of as usual, when Jim came up to him and asked, "Why hasn't Mary been coming to school? You should know because you are one of her best friends." Well, Danny was surprised that Jim was actually talking to him without being mean. He said, "I can't tell you because she doesn't want anybody to know." After that Jim walked away really mad.

--00000000, Nagoya, Japan

Mary had a disease that no one knew about except her parents and family. It wasn't contagious, but her parents still didn't want her to go to school while she was weak. Her disease was called AIDS. Mary told Danny because she trusted him to keep it a secret. She made Danny swear he wouldn't tell anybody, and he didn't. One day Danny was at school getting made fun of as usual, when Jim came up to him and asked, "Why hasn't Mary been coming to school? You should know because you are one of her best friends." Well, Danny was surprised that Jim was actually talking to him without being mean. He said, "I can't tell you because she doesn't want anybody to know." After that Jim walked away really mad.

--00000000, Washington State, USA

ストーリー・リレーの一部

投野式 実践 コーパス入門

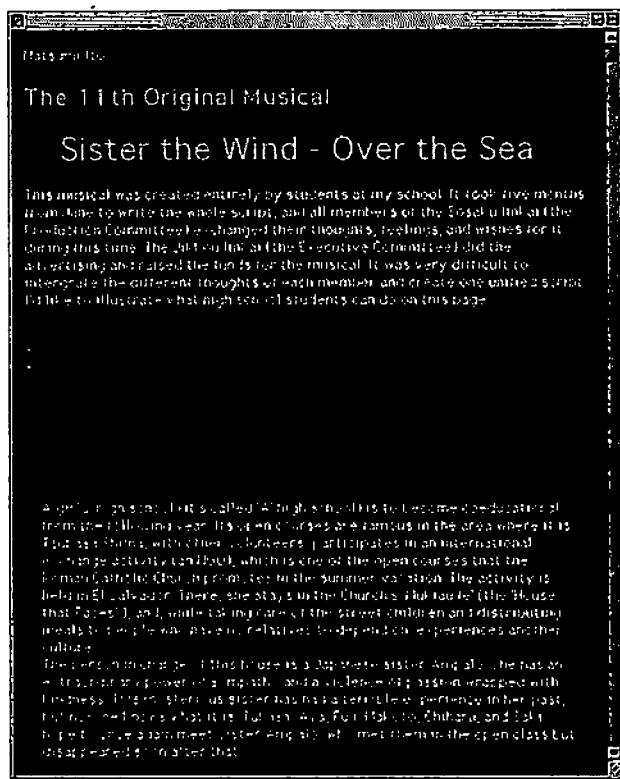
公開！授業に生きる活用術

これは世界中で見ることが出来るので、交流している海外の生徒がストーリーに参加することが出来るようにしてあります。

投野：なかなかクリエイティブですね。

清水：生徒は我々が想像する以上にアイデアが豊富ですよ。生徒のホームページも自分達が主催したミュージカルの製作過程を英語で発表したりしています。(サンフレ web 画面参照)

投野：書く内容があると生徒はノッてくるわけですね。



生徒のホームページの一節

清水先生の見せてくださったページはどれもそれほど高度な英文ではなかったが、高校生がここまで書くのか、と思うほど内容的にクリエイティブだった。英語として polish するというよりも「たくさん書かせるためのタスクと環境づくり」というのが清水先生の基本的な方針のように思えた。

投野：見せていただくと素晴らしい限りですが、ご苦労も多かつたでしょうね。

清水：とにかく時間をとられる点です。電子メールの送受信も一人でやりましたし、こういった授業を可能にするためのコーパス整備やコンピュータ環境作りに膨大な時間をとられましたね。

我々英語教師は日々学校のさまざまな雑務に追われている。授業が命、ということはわかっていても、ついついチャイムが鳴って教科書1冊わしづかみにして生徒にチラッと悪いな、と思いながらもその場限りの授業をしてしまう、ということがままあるだろう。

その時に大事なのは、「少し長期的に見た時の授業設計」ではないだろうか。清水先生のような環境作るのは大変な労苦であるが、いったん作ってしまうと授業は生徒中心になる。教師は環境整備のアドバイザー的な立場として生徒の学習をサポートする。その方が、付け焼刃の準備で必死に黒板で文法説明しているよりも生徒の英語力は伸びたりする。

投野：今回の実践で特に収穫があった、というのはどのような点でしょうか？

清水：授業の内容自体が生徒の興味を引き付けるので、授業時間以外にも自分で率先して様々な準備をしてくるようになります。もちろん個人差はありますけど。それから生徒のアウトプットを学習者コーパスとして分析することができるでの、その面からの語彙・構文的弱点を指導することができます。

投野：海外のペンパルとの電子メールもよい刺激になるでしょうね。

清水：異文化理解の面で、大きな効果があります。メールの相手は、どちらかと言えば移民やアジア圏の子供達の方が多いので、様々なことを知られます。例えば、子供を育てながらアメリカの高校に通うメキシコ移民の女の子や、明日出航するというメールを最後に音信不通になった海軍の青年など…

投野：そういうことすべてが英語を通して体験できているというのが素晴らしい。

清水：英語に触れる時間は通常の授業よりも圧倒的に多いでしょうね。特に、メールを書くには、相手からのメールを読まないと書けませんが、個々



に違うものを受け取りますので、自分で理解するしかなくなります。読む目的や動機も自然と出てくるわけです。そういった意味で非常に総合的なスキル養成の授業になります。



変化する生徒の英語力

最後に清水先生ご自身が効果検証をしたと言うデータについてお聞きしました。

投野：LLAの発表では、97、98年の実践結果をもとに語彙量が増えたかどうかなどを検証されていましたね。

清水：はい。結論から言うと、こういった「英語に大量に触れさせる」というプロジェクトワーク型の授業によって、2000語レベルの語彙サイズには顕著な伸びが見られました。また短期的にも電子メールプロジェクトに参加した生徒とそうでない生徒では、学習目標語彙30語の語彙知識測定で有意差が見られました。

投野：大量のインプットの効果があったと言ふことですね。

清水：インプットだけでなく、自分の中でそれをプロセスするようなタスクの与え方が効果を決めると思います。



まとめ

清水先生の実践はコーパス利用の英語教育としては先駆的なものだ。それにも関わらず、すでに当時、現在問題が指摘されているようなさまざまなe-learningの効果研究に対する配慮も怠っておらず、実践のみならず研究としても大変先見性のあるプロジェクトだったといえよう。

清水先生は情報処理の1級を持っているようなコンピュータ技術のプロである。だから出来るという部分も確かにあるかもしれない。しかし、現在は清水先生がやろうとして苦労した多くの技術的な部分がかなり一般的な我々にも簡単に実現できるような時代になっている。

大事なのは「生徒につけさせてあげたい英語力のイメージ」である。それにふさわしいタスク、それにふさわし

清水氏はさらにいくつかの電子メールを利用した授業のポイントを紹介してくれた。ここに簡単にまとめておこう。

ポイント

- (1)トピックが単調にならないように指導する。
- (2)徐々に例文集や辞書の表現から自立し、独自の表現を用いるよう励ます。また、形式よりも内容を重視するよう励ます。特に教師への依存度が高く、主体的に取り組めない学習者を早期に発見し、指導する。
- (3)短期間での作業内容から長所を見つける。それを各学習者にフィードバックしてやる。また、そのような方法を考案する。
- (4)(2)を含めて、個別学習に対応できるようなシステムを構築する。特にコンピュータを用いて自動化・データベース化していくなければ教師の負担が過剰になり現実的でなくなる。また、データベース化することにより、教材として利用できる可能性もある。
- (5)電子メールの返事が来なくても学習者が焦ったり不安を抱いたりしないように、システム的な学習指導計画を立てておきたい。



い学習環境…そのような自然な発想で、日々の授業を改善していきたい。その際にコーパスが役立つと思えば、使えばいい。ちょっと先まで授業計画を引っ張ってみて、年間ベースでの指導など、全体の環境を変えられるような発想が出てくれれば、あなたもコーパスの活用法やその威力をもっと身近に感じられるかもしれない。



清水伸一先生